

特別賞『中国共产党「天皇工作」秘録』

城山英巳氏

文春新書

事実を追って淡々とつづる



際的孤立から脱するために
「天皇訪中」というカードを
用いたことは、時の中国の外
相錢其琛がみずから回顧録
の中でも明らかにしたことであ
った。この点で知られる「事
業」が実現するにいたった日
中両国指導部での水面下の交
渉のありようをフロントライ
ンで観察してきた著者が、知
られざる挿話を含めて淡々と
綴った著作である。

中国共产党はすでに毛沢東
の時代から、日本における天
皇の深遠な存在、ならびに日
中関係における天皇の傑出し
て大きな利用価値を知悉して
おり、日中関係史は「天皇工
作」の中に最も鮮明な形で投
影される、といつのが著者の
見立てである。読了してみれば、著者のこの見立てがまことに的確なものであったことが
が知られる。

共产党が天安門事件での国

添過程が仔細に描かれる。

当時の日本の世論、特に自
民党内には、天皇訪中が歴史

問題での日本の屈服を意味す
るという懸念の声は強く、他
方、中国では侵略国家日本と
いうイメージが脈々と流れ
いた。複雑に絡み合う相互感
情の中で、歴史問題に終止符
を打ち、新たな日中関係の構
築が不可避だと考える胡耀

邦、鄧小平の路線が継承され、
また日本側では中曾根康弘な
ども慎重論を抑えて、親台派

になってしまったということ
か。「天皇訪中」についての
動かし、ついに「天皇訪中」
が決意されたという経緯が丹
念に描写されている。

しかし、その後の日中関係
において歴史問題が払拭さ
れたかといえば、むしろ逆に
眼としている。ジャーナリストとしての本領が發揮された

【評・渡辺利夫】

2010年11月14日
毎日新聞より